

## 1.日本の大学への出願

### 《出願資格》(主なものを抜粋)

- ・高等学校、中等教育学校、専修学校の高等課程など、文科省認定の国内・在外教育施設を卒業および卒業見込みの者。
- ・外国の正規の学校教育で、原則として12年の課程を修了した者、大学入学資格を保有する者。
- ・高等学校卒業程度認定試験(旧大学入学資格検定)に合格した者、各大学の個別入学資格審査で認められた者など。

### 《帰国生としての認定》(帰国入試に出願する場合)

- ・外国の「正規の」学校教育における12年目の課程を修了していることが原則。通っている学校が正規の学校かどうかは、在外日本大使館などで確認できる。インター校やアメリカンスクールは特に注意。
- ・日本人学校などの在外教育施設、国内の外国人学校出身者を帰国生として認定するかどうかは、大学により異なる。
- ・海外の高校での在籍は、継続2年以上とする大学が多く、最終学年を含むことを条件とするところもある。また帰国後の日本の高校在籍も1~2年未満などと制限する場合がある。
- ・保護者の赴任に伴う海外滞在を条件とするところが多い。単身での留学や保護者が先に帰国した後の残留について制限を設ける大学がある。
- ・既卒生でも出願できるが、卒業後または帰国後の経過年数を2年以内、1年以内とする大学が多い。また渡航前の日本の高校在籍期間を制限し、休学中も在籍とする場合もあるので注意。飛び級や繰上げ卒業を認める大学が多い。

### 《統一試験について》

帰国入試だけでなく、総合型選抜や学校推薦型選抜(旧AO入試、推薦入試)でも評価されることが多い。成績やスコアの反映方法は次の3つに大別される。

- ①必ず提出を求めて、一次選考や、学科試験などと併せて総合的な判定に利用する。
- ②統一試験を受験していれば、成績の提出が望ましい。
- ③統一試験などの成績提出は不要、当日の試験で選考する。

### 主な統一試験

**SAT**(Scholastic Assessment Test) **ACT**(The American College Testing Program)

アメリカの大学進学希望者を対象とした共通試験。アメリカ国内、アメリカ系インター校の高校生が受験し、日本国内でも受けることができる。一般にSATはSAT Reasoning Testを指し、Critical Reading(読解)、Writing(文法+エッセイ)、Math(数学)の3教科のスコアを提出する。スコアを上げるために複数回受験することが多い。

**GCE A-Level**(General Certificate of Education Advanced Level)

イギリス国内、イギリス系インター校で行われる教育課程。義務教育修了時に**GCSE(IGCSE)**(General Certificate of Secondary Education)の統一試験を8~10科目受験、大学進学希望者は、その後さらに2年間の高等教育課程で3~5科目に絞って専門的に勉強し、大学入学資格試験にあたるGCE A-Levelを受ける。大学により科目数等に指定がある。

**国際バカロレアディプロマIBDP**(International Baccalaureate Diploma Programme)

国際的な大学入学資格試験。資格の取得には、DPカリキュラムを全て履修し、試験および内部評価を通じて必要な点数を取る。試験は年2回、世界で一斉に実施される。

**アビトゥア**(Abitur) ドイツの教育制度によるもの。

**バカロレア**(Baccalauréat) 同フランス。

**AP**(Advanced Placement) アメリカの高校で大学の教養科目を履修、試験に合格すると大学での単位が認められる。

**TOEFL iBT**、**IELTS**、**TOEIC**などの英語検定試験。

## 2.選抜方法

### 《帰国入試》ほとんどが併願可

海外の学校で教育を受けた者が対象で、志望理由書等の書類、小論文、学科試験、面接等により選考される。

SAT、GCE A-Level、IB等の外国の大学進学適性試験やTOEFL等の検定試験の成績が評価対象となることが多い。

**4月入学** 国公立：出願 9月~12月 選考 10月~3月 私立：出願 6月~8月 選考 9月~11月

**9月・10月入学** 国公立・私立：出願 前年10月~当年7月 選考 前年11月~当年8月

### ◆提出書類例(本誌「帰国への準備」参照)

在籍証明書Certificate of Enrollment、卒業(見込)証明書Certificate of (Expected) Graduation、

- 成績証明書Official Transcript、推薦状Official Recommendation Letter、統一試験の成績評価証明書、IELTSやTOEFLなどの公式成績証明書、学校の概要(評価方法のわかるHPコピー)School Profile、志望理由書(時間をかけて作成)、海外在留証明(パスポート写し)、健康診断書、保護者の海外勤務証明など
- 取り扱いは大学によって異なり、統一試験のスコアを含めて第一次選考とする大学、海外での成績とあわせて厳密に審査する大学、書類の完備をチェックするだけの大学などさまざま。
  - 帰国後では入手しにくい書類もあるため、できる限り海外滞在中に、多めに準備しておく。大学(学部・学科)によって提出書類は異なり、指定用紙や厳封・封印を要するものもある。早めに依頼して記入漏れのないよう確認しておく。帰国後に推薦状が必要な場合もあるので、先生との信頼関係を築いておくことよい。また、Web出願が増えており、定められた期間に志望理由や先生の推薦状などの入力が必要となるため、こまめにHPをチェックする。
  - SAT、TOEFLなどのスコアは、実施機関より直送を求める大学もあるので要注意。受験時または事後に実施機関のHPより大学コードで申請できる。日数がかかるので余裕をもって手配する必要がある。
  - ボランティアなど課外活動の証明書、学校からの賞など高校時代の成績や活動を証明できるものを持ち帰るとよい。
  - 書類には高校の成績や統一試験結果が含まれ、その審査が一次選考となる大学もある。志望理由書を含む場合は、その分野への強い興味が伝わるように、時間をかけて丁寧に作成する。

#### ◆学科試験

- 文系学部では小論文(国語)・外国語が一般的。小論文だけの場合もある。小論文は最重要視され、多くの大学が日本語での記述を課す。異文化体験を自分のものとしているか、志望学部分野への興味の深さ、社会問題に対する意識、思考力、表現力、日本語運用能力などが問われる。
- 理系学部では、数学・理科に小論文や外国語が加わる場合、小論文が英語の場合などがある。数学・理科は、特に難関大学の学科試験では一般入試と全く同じ試験が課されるため、専門用語を日本語に置き換えて理解するなど、日本的な勉強が必要となる。未履修項目があればカバーしておく。
- 外国語の試験の代わりとして、TOEFLやIELTSなどの英語検定試験のスコア提出を求める大学も多く、増える傾向。

#### ◆面接

- 日本語で行われるのが一般的。
- 適性、意欲、目的意識が問われる。問題意識を持ち、海外体験、志望理由、時事問題、将来の夢などについて、的確に話せるよう練習しておくことよい。理系の学部では、口頭質問として学科の知識を問われることがある。

#### ◀総合型選抜(旧AO入試)▶専願が多い

**日程** 国公立9月～10月、私立6月～11月に出席、選考後、国公立11月～2月、私立 9月～10月に合格発表

**提出書類** 成績書、志望理由書、自己推薦書、活動報告書等の書類をアドミッションセンターに提出。

**選考** 書類審査、面接や論文、プレゼンテーションなどを課し、受験生の能力・適性や学習に対する意欲などを時間をかけて総合的に評価。「高い学習意欲」「学びへの明確な目的意識」を重視し、主に書類審査と面接で合否判定する。学科試験や大学入学共通テストを課す国公立大学もある。

- ◆国公立の4割、私立の8割が実施し、帰国生・外国人留学生向け、IB活用型など、多様な入試がここに組み込まれ、名称もさまざま。推薦がなくても出願でき、志望理由書や研究計画書、面接、論文、討論等で志願者の意欲や適性が大学の求める学生像と合っているかを審査する。成績評定や英語資格試験のスコア等に条件があるところが多く、書類作成に時間もかかるが、海外での経験や語学力を武器にしてチャレンジできる。国公立では、基礎学力を測るために共通テストを課す大学が増えている。

#### ◀学校推薦型選抜(旧推薦入試)▶原則として、合格すれば入学する

**日程** 出願、選考とも総合型選抜に準ずる

**提出書類** 出身高校長の推薦書、調査書、志望理由書、自己推薦書等

**選考** 出身校の推薦に基づき、主に調査書で判定。面接、小論文、学力試験を課す大学もある

- ◆入学者のうち国公立で約12%、私立では40%が推薦選抜を経ている。多くの国公立では大学入学共通テストが課され、医学科で**地域枠推薦**を行う大学が多い。私立では、出身校の推薦を必要とせず受験生自身が能力や意欲、資格・技能やこれまでの活動をアピールする**自己推薦**や、スポーツ、芸術などに秀でた生徒対象のものもある。

**公募制推薦** 高校での評定平均値が出願条件となり、1～2科目の筆記試験と面接、小論文、調査書等により選考される。国公立大学の推薦型選抜の多くはこの方式で、大学入学共通テストが課される場合が多い。

**指定校推薦** 大学が指定した高校に推薦枠を与え、高校の中で成績等による選考を行って校長が推薦した者が出願、面接等で合否判定する。専願。多くの私立大学や一部の公立大学で実施される。

## ＜IBの活用＞

- ・国立28、私立40大学の一部または全学部でIBを活用した入試が実施されている(2022年3月現在)。帰国入試、総合型、推薦型選抜に組み込まれるなど活用方法や名称は大学によりさまざま、増える傾向にある。文科省HP「[国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例](#)」参照。
- ・国内の高校でIBDPを実施している一条校は徐々に増えて、63校、そのうち32校で日本語でのプログラムが実施されている(2022年6月現在)。学習指導要領が定める内容と両方を満たす必要、教員の養成、費用などの課題があるが、文科省はグローバル人材育成の目的からIB実施校を今後も増やす計画を推進している。

## ＜一般選抜(旧一般入試)＞

調査書、学力検査、小論文、面接などによる選抜。国公立大では大学入学共通テストと調査書、個別学力検査(二次試験)を組み合わせる選抜が多く、入学者のうち約80%が一般入試を経由している。私立大では大学入学共通テスト利用、個別選抜など多様なパターンがあり、約50%がこれを経由する。

### 大学入学共通テスト(以下「共通テスト」)

2021年1月より、センター試験に代わって「大学入学共通テスト」が実施されている。これまで通り大学入試センターが作成、採点を行い、形式はマーク式だが、思考力・判断力を発揮して解くことが求められる問題が重視されている。

**出願** 例年9月初めに願書配布が始まり、9月末～10月初めの10日間に出席する。

**試験日** 1月中旬の土・日2日間に全国一斉に実施、下旬に再・追試験日が設けられている。

**試験内容** 国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語の6教科30科目から、志望大学が指定する教科・科目を選択して最大8科目(理科①を選択した場合は9科目)を受験する。外国語はリスニングを含む。

### ◆センター試験からの主な変更点

- ・全体的に問題のページ数が増え、グラフ、地図、写真、文章などの資料が多くなった。教科書で習った知識に加えて、情報を整理して内容を正しく把握する力が求められる。
- ・英語ではリスニングの配点が増えて、読解(リーディング)と同じ割合になった。読む量が増えて速読の力が求められる。発音・アクセントの問題はなくなった。
- ・解答に複数の組み合わせや「該当なし」の形式があり、正しい理解が求められる設問がある。
- ・新しい学習指導要領で学ぶ子どもたちが受験する2025年度共通テスト(2025年1月)からは、新たな教科「情報」を加えて、現在の6教科30科目から7教科21科目になる予定で、2022年度中に詳細が発表される。

### 国公立大学 二次試験

**提出書類** 願書一式、共通テスト成績請求票、調査書等。Web出願が増えている。

**日程** 1月下旬～2月初旬に志望大学に出願し、2月下旬～3月中旬に前期、中期、後期試験が行われる。

**選考** 学科試験(記述式)、面接、論文等。大学や学部によって科目や配点異なる。

**学費** 国立 入学金 約28万円、授業料 約54万円 基本的に学部にかかわらず同額。

公立 入学金 28万～84万円、授業料 約54万円 医科大等で入学金が高い。地域枠で安くなることもある。

◆共通テストと個別学力検査(二次試験)の合計点数で合否が決まり、配点比率は大学、学部によって異なる。

- ・多くの大学が共通テストで7科目を課し、解答は予備校のサイトに即日発表される。受験生は自己採点を行って、予備校が公表する分析データなども参考に志望大学を決め、速やかに二次試験への出願手続きを行う。
- ・大学によっては、共通テストの点数が基準点に満たないと第一段階選抜(足切り)を実施することがある。
- ・二次試験には前期・後期・中期(一部公立のみ)日程があり、別々の大学に出願できるが、手続きは同時に行う。前期合格者は中期の合格対象から外れ、後期は受験できない。前期と後期の募集人員の割合は8:2で、さらに後期日程を廃止して、その募集人員を前期日程や推薦型・総合型選抜に振り替える大学が年々増えている。

### 私立大学 個別選抜

**提出書類** 調査書、英語資格試験のスコア等、各大学が必要とする書類。Web出願が多い。

**日程** 出願 1月上旬 選考 一期 1月下旬～2月下旬 二期 3月(国公立大の合格発表後)

**選考** 一般選抜 英語を含む3科目の筆記試験が多い。学部により科目配点異なる。

共通テスト利用 共通テストのうち、3～4科目の結果のみで判定する型、独自試験との併用型がある。全私立の9割が利用しており、必須とする大学・学部も増えている。

その他の選抜 書類審査、論文、面接等を組み合わせた選考が多い。英語の試験の代わりに、TOEFLやIELTS、英検等の資格活用が増えている。

**学費** 入学金 20万～200万円、授業料 60万～400万円 医歯薬系、芸術系、情報工学系大で高く、特に医歯薬では初年度納付金が1,000万円を超える大学もある。

### 3. 入試改革と今後の動き

#### 《高大接続改革計画の混迷》

グローバル人材育成への危機感から2012年から始まった高大接続改革だが、国が掲げていた目標の多くが頓挫した。

- ・「話す・書く」も含めた英語の4技能を測るためとして、2021年度入試での導入が予定されていた民間試験の利用が、受験機会の公平性に課題があることから延期、これを利用しない募集区分の設定などを大学側に求めることになった。
- ・2024年度共通テストでの実施を目指していた記述式問題も、採点の民間委託を含めて検討されていたが、やはり公平性に課題があることから中止された。今後は、個別試験で採用する大学への補助金などで活用を促すとしている。
- ・高校生の基礎学力を本人と学校が把握するために、漢検、数検、英検等の民間試験をツールとして活用する「高校生のための学びの基礎診断」の導入計画も、立ち消えになっている。

#### 《コロナ禍の影響》

- ・共通テストで第2日程や特例追試験が設けられているが、2022年度入試では、二次試験や個別試験については前年のような中止の動きは見られず、予定通り実施された。
- ・2021年度入試では首都圏を敬遠して地元志向の高まりが見られたが、2022年度は首都圏大学志望の割合が増えた。一方私立大学の倍率は減少したままで、競争緩和が続いている。
- ・国公立、私立とも、情報、食品、医薬などの理系学部、資格取得系学部の人気が高くなっている。低下していた国際系学部の人気は回復に向かっている。

#### 《グローバル人材の育成》

グローバル競争の激化、地球規模課題の噴出、国際情勢の変化により、これまで以上にグローバルな課題に対峙する必要があるとして、文科省は「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性 ～コロナ禍で激減した学生交流の回復に向けて～」を発表(2022年7月)。外国人・日本人の留学の回復や大学の国際化など、国際流動性の実現を産学官で目指す。

##### スーパーグローバル大学

国際競争力の強化を目指して、国公私立37大学を「スーパーグローバル大学」として2015年度から国が財政的に支援している。海外から優秀な教員を獲得し世界大学ランキング100位以内を目指す「トップ型」に13校、大学教育の国際化のモデルを示す「グローバル化牽引型」に24校が選定され、教育・研究の国際化が期待されている。

##### トビタテ！留学JAPAN

官民連携の海外留学の奨学金制度。企業・団体の寄付により、書類と面接で選抜された大学生や高等専門学校生、高校生に、1カ月～2年間の留学や海外でのインターンシップのための渡航費、授業料、生活費、研究費が支給される。留学促進の観点から事業の発展的推進が決まり、2023～2027年度の5年間、次期プログラムが実施される。

##### 4学期制の採用、秋入学

従来の4月入学、前期・後期の2学期制に加え、約2カ月ずつのクォーター制や秋入学を実施する大学が国公立、私立とも増えており、留学生の送り出し、受け入れ増加が見込まれる。また、入学前に社会奉仕や就業体験をする欧米の「ギャップイヤー」をモデルに、能動的な学びや異文化体験を目的として選抜された者が留学等を行う大学もある。

### 4. 海外の大学への進学

小中高の間に帰国して、大学の教育は海外で受けたいと考える帰国生は少なくない。また国内一般生の中にも海外進学を選択肢の一つと考える生徒が増えている。海外大学の選考は国や大学によって異なるが、高校の卒業資格証明書や成績(GPA)、志望理由書、推薦状、SAT、TOEFL、IELTS等のスコアなどの総合的な審査により合否が決定される。

- ・スコアを上げるために複数回受けるテストなどは、日本での受験会場や回数の少ないものもあるので、早めに予約し計画的に受ける。これらのスコアの証明書は実施機関から大学へ直送を依頼する。
- ・成績証明書、推薦状、志望理由書(エッセイ)は英文またはその国の言語での提出なので、早めに学校に相談する。エッセイは特に重要で、志望理由、将来の目標やこれまでの活動などを、自分の個性をうまくアピールして書く。
- ・授業料は高額な場合が多く、寮費、生活費などもよく把握して準備を進める。成績等により利用できる奨学金制度を持つ大学もある。国別、大学別に必要な情報や経験談をまとめたサイトもあるので、参考にするとよい。

### 5. 帰国生の声、保護者の声 2022年度版より併記。文中「AO入試」は現「総合型選抜」

#### 日本の大学への入学

＜書類準備＞・日本の学校に不慣れなインター校だったので推薦状を紫のペンで手書きされたり、厳封の理解が違ったり苦労した。最初に細かく具体的に希望を伝える事が大切だと思った。帰国後必要となる書類の有無、インター校の休み中の連絡先など、前もって準備することが大切。担任の先生よりも事務の責任者と校

長先生を窓口にするとスムーズだった

- ・大学によって書式や内容が異なり、校長直筆サイン、エンボスの位置もさまざまで本当に苦労したが、カウンセラーがとても親切で、辛抱強く書類を完璧に用意してくれた ・帰国後の予備校が決まっていたため、書類のことなどメールで質問できた ・帰国後、追加で必要になった書類があった
  - ・現地の学校が夏休みに入り、書類の訂正がなかなかできず、不備があったりした
- <出 願> ・インター校Y10を卒業後、高校2年生11月に編入。現地では学校の成績や活動を最優先に生活していたので、TOEFL等の特別な対策はしていなかったが、インター校でのGPA等が基準を満たしていたので公募推薦で入学できた
- ・現地校のG10を修了後帰国、高2の9月に編入した。学校の成績と、塾で英語力(TOEFL iBTとエッセイ)を伸ばす努力をしながら、AO入試で入学した。成績の評定が最低でも4.0以上要するところが多かった
  - ・小6で帰国。AO入試は志望理由や自己PRの文書作成に時間がかかり、必要書類や提出方法が違って大変だった。SATとTOEFLのスコア+書類選考の大学があるのを知りSATも高2から受けた。結局第2志望の大学に合格、出願していた残りの試験は辞退した。生徒会、SGH、部活、模擬国連、ボランティア、高大連携プログラムなどに積極的に参加する娘だったので、AO入試が向いていたのだと思う
- <受験準備> ・小6、高3で2回帰国受験を体験したが、小学校では小論文の書き方で日本語力が上がり、高3では英語だけではなく全ての学科で努力し苦手を克服したことが、大学入学後も課題等に取り組む姿勢に役立っていると思う。アウトプット重視のインター校だったので、自分の意見を述べるのは得意だが、TOEFLのスコアアップには苦労した。そのため受験の年の夏休みだけ日本でTOEFL専門の塾に通った
- ・アメリカの大学も考えていたので、たくさんの統一テストを頻回に受けるのが大変だった。アメリカの大学に必要なACTは現地校で定期的に受けられたが、帰国入試に必要なSAT、TOEFLを帰国前2年以内に高得点を目指したため、現地校の勉強、課外活動、ボランティアなどとの両立がとても大変だった
  - ・成績が良くないとボランティアもできないことがあり、とにかくGPAを早いうちに上げる努力が大事
  - ・TOEFLとSATの数学のスコアアップ、英語論文の添削のために、12年生になる前の夏休みに日本で帰国子女専門の予備校に通い、海外でもPCによる論文指導を受けた ・予備校で同じ境遇の友だちがたくさんできてよかった。理系クラスでお互いに切磋琢磨し、たまに息抜きも共にできた
  - ・第一志望の大学に合格、外国学校卒業学生選抜の自分でもついていけるか不安はあったと思いますが、希望の学部・学科に進めて、海外生活での苦労、海外からずっと続いた受験生活を乗り越えたことで、他の学生には負けないという気持ちを持たせた感じでした

#### 海外の大学への入学

- <アメリカ> ・先輩(在学生)の話を聞いて魅力的に感じた。Campus Visitなどで実際に大学に泊まって一緒に授業を受けさせて貰った。受講したい教授のゼミがあったこと、大学独自の奨学金Financial Aid(在学生の55%が貰っている)が充実していたこともあった。出願には推薦状(学校の先生から3通、学校以外の人から2通)、エッセイ、SAT I・II、TOEFL、課外活動(ディベート世界大会優勝、模擬国連、マジック等)に打ち込んだ実績を提出した。高校の3年間は受験勉強だけではなく、いろんな課外活動に取り組んだことが良かった。周りに海外進学の事例が少ない場合は特に積極的に行動をして情報を収集、学校の先生に説明をして巻き込む事が大事。入学後は実際に希望していた教授のゼミを受講することができた。周りのレベルが非常に高く、日々の課題に夜を徹した。また、要人が頻繁に来校して講義や卒業式で話したり、企業との合同研究があったりなど、社会との繋がりがとても多いと感じた
- ・元々大学で留学または海外大学に進学することを考えて高校は国際文化科に進んだ。高校に入り国立大学志望が変わったためセンター試験を受けたが、その直後に初心に戻り、急に海外大学への進学を希望。2月下旬での進路変更で何も情報がなかったため、業者に依頼した。言われるがまま書類(日本の高校での成績、英文の成績証明書、TOEFLの点数、自己紹介および志望理由書、銀行の英文残高証明書など)を準備し、希望する学部がある大学の中から評定に合った大学に決定した。コロナ禍のため最初の半年は日本でオンライン授業を受け、2021年1月から寮に入って大学生活を送っている。寮は大学の敷地内にあり外国人学生3人とリビングをシェアし個室。食事はカフェでもできるが(有料)、基本的に自炊または外食している。2022年の秋学期から興味のあるLABに参加する一方、就職を意識しオンラインでのインターンシップにも参加している
  - ・本人の志望により、看護学科があって、以前の在住地に近い大学の中から選択。高3の年末までに6校程度に絞って、日本の高校での成績、先生方3人の英文推薦状、TOEFL、自己紹介ならびに志望理由などを

伝えるエッセイと銀行の残高証明などを各大学に提出。出願は費用がいらない大学もあった。合格をもたらした中で、唯一スカイプによる面接があり、その中で、看護学科へのダイレクトエントリーの許可をもらった大学に進学先を決めたのは高3の2月頃。寮は市街地から離れた大学の敷地内にあり、食事は口に合わないものも多いが、勉強に集中できる環境のようだ。コロナ禍では学科的に病院実習などで制約も受けたようだが、実習をするということで早めにワクチン接種を受けられ、ワクチンを打つボランティアもしたようだ。離れていても密に連絡を取り合えたので、大きな心配をすることはなかった

- <イギリス>
- 息子はアメリカの現地校に通っていた高2の秋に、いつになるかわからない父親の転勤に備えて、高校卒業資格を必要としないイギリスの大学に出願した。UCASという機関のサイトから10~1月に5校まで一度に出願(先生からの推薦状、自己推薦状、A-Level、AP、SAT、IB等の見込み点数を提出)し、順次、各大学から結果が届く。合格(条件付き含む)した中から2校を5~6月までに絞り込み、最終合否はA-Level、AP、IB等の試験結果で決まる。高3の6月に帰国となったがAPの結果が出た7月に合格が決まり、9月に入学することができた。結果が出るまで長丁場だったが、大学により面接や寮に宿泊してのオープンデイなどもあり、じっくりと決めることができた。大学生活の後半は、コロナ禍で全てがオンライン対応となり帰国していたが、卒業までの最後の約4カ月はイギリスに戻った。この夏に遅れて行われた卒業式には参加できず、残念だった
  - 日本的一条校にあるIBコースでディプロマを取得し、そのスコアとパーソナルステートメント(エッセイ)、推薦状でUCASを通して出願した。学部によってはポートフォリオも必要とのこと。直接大学の方と話せる国内での留学フェア等で大学を選んだ。11月のIB本試験のため、9月の仮試験のスコアで10月から早めに出願して条件付き合格をもらい、その後本試験の結果を報告。合否が早い大学と遅い大学で差があり、最終1校に絞るのに時間がかかった。その間、他国の大学も出願したが、イギリスの出願方法が一番シンプルだった。わが家は文系の中でもビジネスコースのため、授業料が18,500ポンドと高いが、地方の大学なので生活費はロンドンに比べると月2~3万円ほど安く、助かった。2020年からはコロナで授業がオンラインになったため、一時は帰国して、日本から受講していた。中には1年間休学やインターンシップでようすを見る友だちもいたが、未曾有の出来事の中、同じ入学した仲間と一緒に卒業することを選び、3年間で無事卒業することができたのが何よりだった

## 6.まとめ

大学入試は、国公立、私立とも多様化しており、帰国生にとっても「帰国入試」以外の選択肢が増えている。学科試験だけでは測れない多彩な人材を求めて、小論文や英語検定試験のスコア、海外の統一試験などを活用する出願・選抜方法があるので、帰国後の年数が長くても自分の強みをいかせる選抜を選ぶとよい。帰国入試やグローバル入試の多くが併願可能なのに対し、総合型や推薦型選抜は専願が多く、原則として合格すれば必ず入学する。多くの帰国生は帰国入試のノウハウを持つ予備校に6月頃から通って準備を進めるが、出願時期の早い入試もあり、必要書類も多いので早めに情報を入手し、計画的に準備を進める。オープンキャンパスや大学祭などの行事の中にはコロナの影響で縮小されたものもあるが、国公立私立大の合同説明会や大手予備校による入試説明会がオンラインで行われているので、情報を集めておくとよい。

受験準備も大切だが、海外にいる間は、学習に全力で取り組んで成績を上げるとともに、友人を作り、社会的な活動にも積極的に参加するよう努める。出願書類に活動内容のレポート提出を課すところもあるので、ボランティアや課外活動などの証明書は整理して保管しておく、小論文や面接にも役立ち、何よりその経験が一生の宝となるだろう。

入試改革に加えて、海外でも国内でも、コロナ禍に翻弄される高校生活を送ってきた2022年度の受験生だったが、前年までの先輩に比べると入学後の生活はかなり回復してきたと言える。多くの大学で対面授業が再開し、サークル活動への制限も緩和された。交換留学がオンラインや休止になるなどの影響は残るものの、大学生らしいキャンパスライフを楽しめる環境が戻ってきているようだ。これまで不自由な思いをした分も、学生時代という貴重な時間を思い切り楽しんで、希望する進路を目指してほしい。

参考 文部科学省HP (独)大学入試センターHP 日本経済新聞 河合塾Kei-net 代々木ゼミナールデータリサーチ (NPO法人)留学フェロシップHP